第 41 回 全国大会 研究ワークショップ 開催案内

日時：2026 年 12 月 5 日(土)10:30~12:00 会場： 淑徳大学東京キャンパス

会場：9 号館 1 階 101 教室（第 3 会場） 研究ワークショップ① 研究発表、ディスカッション

タイトル：気候変動を受けたルーラルツーリズム実践者の意識と行動
―イタリア・オーストリア・アメリカと日本のワイナリーの比較からー

代表者：五艘みどり・山田耕生・平形和世・國井大輔

気候変動を受けて、ルーラルツーリズム実践者の意識と行動はどのように変化しているのか。また、農業経営や農村の持続に向けて、ツーリズムはどのような役割を果たし得るのか。本ワークショップでは、気候変動の影響を受けやすく、ツーリズムとも密接に関わるワイン産地に着目し、欧米および日本で実施した 3 年間の調査結果を比較する。ワークショップは研究報告として、①イタリア・プーリア州、②アメリカ・カリフォルニア州ナパバレー、③オーストリア・ニーダーエスタライヒ州、④日本の全ワイナリーにおける、ブドウ生産者・ワイナリー・生産組合・行政関係者等へのインタビューやアンケート調査結果をもとに、気候変動に対する認識・その対応としての行動・観光事業への参入やその位置づけを報告する。さらに、各国の比較を通じて、気候変動への適応とツーリズムとの関係、海外で得られた知見の日本への応用可能性を提示する。これらの報告をもとに、参加者との意見交換を行い、気候変動下におけるルーラルツーリズムと農村の持続可能性について議論させていただきたい。

問い合わせ先：五艘みどり
E-mail：gosou.midori.nh@teikyo-u.ac.jp

会場：9 号館 2 階 201 教室（第 4 会場） 研究ワークショップ② 研究発表 、ディスカッション

タイトル：酒蔵の開放から観光酒蔵へー酒蔵と観光（ツーリズム）の関係性

代表者： 辻のぞみ・永田美江子・マリア・ヨトヴァ・近藤政幸・稲本恵子・尾家建生

本研究では、酒蔵（日本酒）と観光の関係について歴史的な視点から考察してきた結果、古代の神事に始まった酒造りは、中世には技術的な発展を遂げ、近世においては酒造りが絵図により図解された。近代においては内国博覧会や品評会により商品の宣伝はされてきたものの酒蔵は観光の対象ではなかった。しかし、1970 年頃から「酒蔵の開放」という蔵元の意識に起因して酒蔵見学、試飲、購買、資料の公開が実施され、日本酒の観光化が始まった。マスツーリズムの時代、団体観光バスの「立ち寄り観光」という形態が生まれ、観光蔵と呼ばれるに至った。消費者の酒蔵への高まる関心に着目した蔵元は、酒蔵の観光資源化に向けて蔵開き、酒まつりなどのイベントにより積極的に観光的活動を試みた。しかし北海道の十勝・池田町では 1960 年代にワインは既に観光資源となっていたことと比較すると、酒蔵が一般に観光資源として見られ始めたのは 1990 年以降であり、その後、「酒蔵ツーリズム」により酒蔵が観光促進に組み込まれたのは 2010 年以降の比較的最近の事である。

本 WS においては、1980 年前後の「酒蔵の開放」によってそれ以降日本酒に関わる観光の持つ意味と役割がどう変化し、地域において日本酒の観光的価値が今後どう変化するのかを、事例発表及び会場とのディスカッションにより探りたい。

問い合わせ先：尾家建生
E-mail：oietateo0@gmail.com